オレゴン留学日記（3）

早稲田大学教育学部３年・オレゴン大学へ留学中

清沢　健二

本寄稿を書いている10月13日現在、オレゴンでの生活ももう１ヶ月を過ぎています。授業では、毎回かなりの量のリーディングが課されています。ペーパーを出す課題もありますし、リーディングをチェックするためのクイズが頻繁に行われます。それがすべて成績に反映するので、どの課題も気が抜けません。早稲田大学の授業では、多くが前期後期に一回ずつ行われるテストの一発勝負でした。なので、テスト前以外は集中して勉強する時間を作る機会をなかなか作ることができませんでした。学問を追及する場としての大学、そのアカデミックな雰囲気を、ひしひしと感じながら日々過ごしています。

タンザニアでのNGO活動

私は世界における貧困問題に関心があり、それを解決していくために何か自分でできることはないかと考え、大学一年生の頃からボランティア活動を行ってきました。今年の8月には、タンザニアへ児童教育施設を建設するワークキャンプに参加しました。活動場所は、首都ダルエスサラームからフェリーで北東に6時間ほど移動したところにある、ペンバ島という小さな島です。ペンバ島での教育は小学校から始まり、幼稚園がありません。そこで、ダルエスサラームがある本土と同じように、幼稚園からの教育を始めるための施設を建設するというプログラムでした。

施設作りは、傾斜が15度くらいあるところに土台を作るため、土地を平らにならしていくところからはじめました。機械はありません。鋤と鍬とスコップを使い、すべて人力で行っていきます。結局、その傾斜を平らにするのに1週間かかり、残りの1週間を土台となる瓦礫、レンガ運びに費やしたため、2週間で建物の基礎中の基礎の部分しか作ることができませんでした。地元ボランティアの「ポレポレ」(スワヒリ語で「ゆっくり、ゆっくりの意」)の精神があるため、なかなか効率よく仕事を進められなかったことをみんな残念がっていました。しかし、私も含め国際ボランティアが積極的にアイディアを出し合って、みんなでよりよいワークキャンプにしようとしていたことは誇れるものですし、地元の住民との交流も大きな意味のあるものだったと思います。

タンザニアの子どもたちと（後ろが作業場です）

今年の10月には、これまでのボランティア活動が評価され、財団法人信濃育英会が主催する「明るい社会に貢献する奨学生」に選ばれました。光栄なことに、奨学生12人の中で1送る人にだけ贈られる特別な賞もいただくことができました。私が行ってきた活動がこういった形で評価されるのは私にとって大きな励みになりましたし、これからも明るい社会に貢献していけるように、一つ一つ経験を積み重ねていくつもりです。

友人学園でのボランティア

オレゴン州ユージーンには、日本語でのイマージョン教育（第二言語での言語、教科学習）を行う友人学園という公立学校があります。幼稚園生から小学生までを対象とした学校です。今年の9月に、バイリンガリズムを専攻する私のゼミの仲間と共にボランティア活動をするために、友人学園に行ってきました。友人学園では英語を母国語とする子どもたちが、英語での授業に加えて日本語で様々な教科を学んでいます。

私たちは、日本語と英語の両方のクラスで、アシスタント講師として子どもたちの学習の補助をしました。まず驚かされたのは、子どもたちの日本語リスニング能力です。先生や私たちが言っていることはかなりのレベルまで理解していましたし、それに対する反応も、話す力と書く力の発達は、聞き取り能力に比べてずいぶんと遅れていると感じました。

私が興味を持っている、言語習得の臨界期、つまり何歳の子どもが最も効果的に第二言語を習得するのかということについて、この友人学園の児童をもっと長い間見ていくことで、問題の糸口が解けていく気がします。留学中の長期的なボランティアも視野に入れ、第二言語習得についての学習を進めていくつもりです。